中間構文と認知構造

山 下 美津子

The Middle Construction and the Cognitive Structures

Mitsuko Nieda-YAMASHITA

Received April 30, 1996

抄 録： 英語の中間構文は能動形で表されているが，主語は動作主ではなく非動作主である。本論文ではこの意味構造と文構造との関係を認知言語学的視点から明らかにする。基本パターン，認知スコープ，特定化などを考慮に入れて認知構造を考えると，中間構文は根本的には【他動】の基本パターンから拡張した認知構造を持つ。動作主は背景化されていて主語にはならず，非動作主の方に焦点が当てられて前景化され主語となっている。動作主は存在するが，言語化されていない。非動作主を主語としている構文には他に受動形と能格構文があるが，受動形は中間構文と根本的には同じ【他動】の認知構造を持つが，認知のスコープは異なっている。一方，能格構文は基本的に【変化】の認知構造で，根本的に中間構文と異なる。

索引語： 中間構文，認知構造，認知スコープ，「図」／「地」，他動

Abstract： This paper deals with the English middle construction in the framework of cognitive grammar. The analysis utilizes the representation of the canonical event model, which combines the stage-model and the action chain. It reveals the reason for using this middle construction regardless of the passive and the ergative construction, subjects of which are also patients. And the cognitive structure shows clearly how we mentally recognize an agent which is not realized linguistically. In terms of linguistic coding of a conceived event, the subject of a clause corresponds to the figure (and the object to the most salient participant within the ground of the action chain.) The basic cognitive structure of the middle is transitive, and the agent is the ground and the patient is the figure in the middle construction. The basic cognitive structure of the passive is similar but is different in the scope, while that of the ergative construction is intransitive.

Key words： the middle construction, the cognitive construction, the scope of cognition, figure／ground organization, transitive

1．はじめに

日常言語には，外部世界に対する我々の認識の仕方が投影されている。同じ出来事を伝える場合でも，その表現の仕方の違いに話者の認識の仕方の違いが現れていると考えられる。この視点にたつと，ある出来事を伝えるのに，中間構文を用いた場合と，ある点では類似してはいるが能格構文，受動文を用いた場合では，それぞれ認知の仕方が異なることになる。この論文では，この認知言語学の立場にたって，いわゆる中間構文と呼ばれている文の構造では，関連のある文構造との意味関係をどのように捉えらえるのかを見て行く。中間構文，受動文，能格構文の認知構造の違いを見ることで，中間構文の特徴を明確にしたい。

1．(a) The bottle breaks easily.

2．(b) This book sells well.

3．(c) This car drives nicely.

これらの文では，受動形を取らず能動形であるにもかかわらず，主語はいわゆる動作主（Agent）ではなく被動作主（Patient）である[1]。しかしながら，同じように被動作主（Patient）を主語にしている受動形の文構造をした文とは，同じ出来事を伝えているが，出来事に対する認識の仕方は異なり，伝える意味は同じではない。そのことは，下記の受動形の文4(a)と上記の1(a)はつぎのような異なった点に表れている。

4．(a) This bottle was broken.

第一に，4(a)の文は4(b)のように動作主を特定できるのに対して，中間構文ではできない。

4．(b) This bottle was broken by Mary.

1．(b) ＊This bottle breaks easily by Mary.

また1(a)の文では次の1(c)のような特定な動作主の存在は考えられず，1(d)のように不特定な動作主の存在が認識される。一方，中間構文の文では現在時制で表され，役所など公の場所で使用される文によく用いられる[2]。

1．(c) Mary broke this bottle easily.

1．(d) People in general break this bottle easily.

これらの事実は，次の時制の問題とも関連があると思われる。4(b)の文は現在時制で表されると意味が異なり壊れている状態を意味し，1(c)も過去時制で表す場合と現在時制で表す場合では伝える意味が異なる。

4．(d) This bottle is broken by Mary.

1．(e) Mary breaks this bottle easily.

これらの事実は同じ出来事を伝えているのであるが，どの構文を用いるかによって，その出来事に対する認識が全く同じではないことを示している。この中間構文，それと関連のある能動文，受動文の相互の意味関係は，認知構造を明らかにし，相対的に位置づけることによって可能になる。

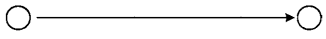
さらに他動詞構文に表れる全ての動詞が中間構文に用いられるとは限らない。例えば，5に対し6の文は認められない。

5．Mary bought the book.

6．＊This book buys well.

2．(b) This book sells well.

売り手から，買い手に本が移動するという点ではSELLの場合とBUYでは同じである。



しかし，2(b)は言えるのに対し，6の文は認められない。このことも中間構文の一面を示している。このことを認知的な規定を試みていく過程で明かにしていきたい。

また例文7．8．9．のように被動作主が主語になっているいわゆる能格構文についても，中間構文との意味の違いなどを認知的な規定から明らかにしていく。また，これらの文は1～3の文に比べて，副詞を伴わないという点の他に，認知的な捉え方の点でも異なる。その違いも中間構文と比較してその関係を認知構造の違いから見ていきたい。

7．The paint peeled.

8．The ball bounced.

9．The door closed.

これらの文では，動作主の存在は中間構文の場合より弱く感じられ，被動作主からエネルギーが出ており，被動作主が動かされるより，被動作主そのものが動いていると認識される。その理由を考察する。また，つぎの10の例文は副詞を伴ってはいるが，中間，能格どちらの構文の解釈も可能である。

10. The door opens easily.

一見類似した構文をとりながら，その違いはどこから生じるのか認知構造の違いから見て行きたい。

2．事態の認知

2．1．認知ネットワーク

2．1．1．認知モデルの導入

外部世界にたいする我々の認識の仕方が言語に投影されているとすると，同じ状況を伝えようとする場合にも，受動文で表現する場合と，中間構文を用いて表現する場合では，外部世界にたいする話者の視点の置き方，パースペクティヴのとり方が異なっていることになる。特に，中間構文を考える場合に特徴的なことは，言語上記述されていない行為者（動作主）の存在と，そこから動作が主語として表されている名詞に及んでいるという点である。そのことは，我々が事態の変化とエネルギーの動きを捉えていることを示している。この事態の内部の構造と動きをとらえるには，認知モデルを導入し，ビリアードボール・モデルを用いるのがエネルギーの動きが視覚的に見えるのでよいと思われる。

Langackerは，事態は個々の物体から成り立ち，それらの物体は運動し，エネルギー伝達を行うことで相互に影響しあうとするビリアードボール・モデルを示した。ビリアードモデルと呼ばれる認知モデルでモノ（エネルギーの出発点）からモノへのエネルギーの動き（移動）で外部世界の事態を捉えた[3]。

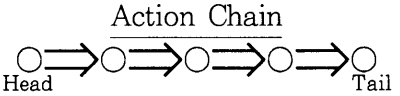


Figure 1[4]

この図はエネルギーの推移をよく示している。 例えば，次の8のa～cの文にたいしては，それぞれ9のa～cのような規定を与えている[5]。

8．a. Floyd broke the glass with the hammer.
b. The hammer (easily) broke the glass.
c. The glass (easily) broke.
d Floyd hit the hammer against the glass.

9．a. ●⟹●⟹●
b. ○⟹●⟹●
c. ○⟹○⟹●
d. ●⟹●⟹○

Figure 2

以上のモデルを用いることによって，行為の因果関係がはっきりし，関与者と関与者の関係が明らかになる。

ここで大切なことは，モノ（関与者）の中で，我々の注意は最もエネルギーの強いモノか特定のモノに焦点を当てるということを考慮に入れ，「図」と「地」の解釈を取り入れている点である。太い線で描かれたモノがaction chainの中で，「図」（figure）に相当し，文中で細い線で描かれたモノが「地」（ground）の中で最も目立ったモノに相当するという点である。我々が，ある対象を認知する場合には，その対象のもっとも際立った部分に焦点をあてながら認知していく。この場合，一般にこの際立っている部分，ないしは焦点化されている部分は「図」（figure）に，その背景になっている部分は「地」（ground）とみなされる。（別の見方からすれば，前景になっている部分が「図」，背景となっている部分が「地」ということになる。）このことにより，8．aでは行為を行う主体（エネルギーの出発点），手段，行為の影響を受ける対象のいずれも「図」になり（前景化），8．bでは，主体は「地」で背景化され，手段と対象だけが前景化されて，8．cでは，主体も手段も背景化され，対象だけが前景化されていることが示されている。さらに，矢印の部分も太い線で書かれたものは，話者の焦点があった所で前景化され，細い線で書かれた部分は背景化されたものである。

このことから，中間構文を考えてみるとFigure 2の9．cがそれにあたり，9．aの他動詞文との違いが明確になっている。が，9．aは，エネルギーの出発点である行為を行ったものに焦点が当たっており，太い線で書かれるのは，左端の○に留めるべきである。なぜなら，ここで重要なことは，認知構造の違いがいかに言語に反映されるかであるからである。事態にかかわっているモノの中から，焦点化されたものを他のものといかに区別しているかは，言語上注意を最も受けたものが主語とみなされるという傾向で示される。Langacker（1991 b）は主語をtrajectorとみなし，それはプロファイルの中で「図」であり言語的には主語として選ばれる傾向にあるとしている。[6]つまり，主語が「図」に相当し，目的語が「地」（ground）のなかで最も目立ったモノに相当するという点に注目しなくてはならない。決してエネルギーの出発点，つまり動作主が主語になるとは限らず，焦点化されたものが主語になるという考えは，様々な問題に解明の糸口を与えてくれる。

しかし，ビリアードボール・モデルだけでは，事態に至るプロセス，変化などが，具体的にしめされない。事態の認知という点で，Croft（1990）のcausal chainがあげられる。Croftは

Figure 3で図式化されるように事態をCAUSE（使役），BECOME（変化），STATE（状態）の3つの部分からなるとし，非対称的なエネルギーの移動が関与者間にあることを示した。

Subj. Obj. Obj. Obj.

CAUSE BECOME STATE

Figure 3 [7)]

このようにエネルギーの移動の過程を3つに分けることによって，事態のどの部分が焦点化されて前景化されるか明らかにしやすく，モノからモノへエネルギーがどのように働いているかが明らかになる。

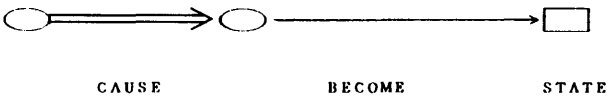


Figure 4 [8)]

これを用いることによって，事態に関与しているモノだけでなく，事態のどの部分に焦点が当たり前景化されるか，また，どの関与者と過程が背景化されるかを明らかすることができる。ここでは，エネルギーの移動の過程を《使役》(CAUSE),《変化》(BECOME),《状態》(STATE) に分け，それと関与するモノとの関係をどのようにとらえているかを見ることによって，様々な種類の認知構造が明らかになる。

2．1．2．基本的な認知ネットワーク

構文のネットワークは，プロトタイプとそれからの拡張（extensions）からなる。[9)] 事態を認識するには基本的なパターンがあり，認知パターンに基本構文が対応し，基本パターンが一部異なるパターンに拡張すると，それに対応する構文も拡張する。さらに，その拡張されたパターンから，別の拡張された構文が生まれてくる。上記のことをふまえて，事態を認識する基本的な過程を，他動，変化，状態のネットワークから規定していくと次のようになる。

（1）【他動】（1）○⇒○→□

（2）【変化】（2）○→□

（3）【状態】（3）□

（1）の【他動】のパターンでは，行為にかかわるモノは二つで，3つの過程がすべて，認識されており，エネルギーの発生源のものから出たエネルギーが他のものに影響を与えて変化を起こさせるような事態であり，事態の起こりから結果の状態に至るまでを認知するパターンである。このパターンは他動詞構文で対応される。換言すれば，他動詞構文は【他動】パターンのプロトタイプに対応して表されたものだといえる。



Figure 5

この基本的な認知パターンは，次のような文によって表現される。

10. John killed the worm.
11. John opened the door.

さらに，この基本パターンから一部拡張したものに対応した表現に次のような文がある。

12. The key opened the door.
13. John kicked the ball.

例文８．ｂ．の認知構造９．ｂ．が示すように，the hammerも，例文12のthe keyも主語になっているが，行為を行ったものではなく，その行為をなす道具（手段）であり，しかも表現には現れていないCAUSERの存在が感じ取られる。従って，12も８．ｂも拡張した【他動】のパターンでとらえられていると考えられる。例文13もthe ballに変化は起こらないが，やはり拡張した【他動】のパターンで捉えられていると考えられる。

（２）の【変化】のパターンでは，モノ（関与者）の移動や，状態の変化などがとらえられ，その認知構造は次のようになるであろう。

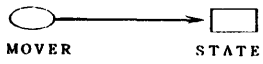


Figure 6

基本的には，時間の経緯とともにある状態から別の状態への変化としてとらえられる。これに対応するのは基本的には自動詞構文である。

14. The ball rolled down the road.
15. The door opened automatically.

事態が（３）の【状態】として認知される場合は，モノ（関与者）の制限の無い時間でのあり様，モノ（関与者）とモノ（関与者）との位置関係などをとらえる。その認知構造は次のように表すことができる。



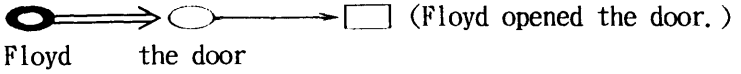
Figure 7

その具体的に表現された文は，次のようなものがある。

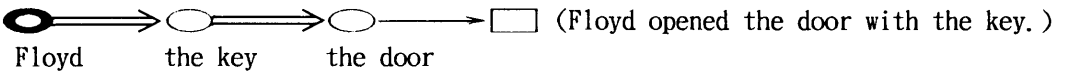
16. The door is open.
17. The dool is on the chair.

２．１．３．【他動】のパターンのプロトタイプと拡張されたタイプ

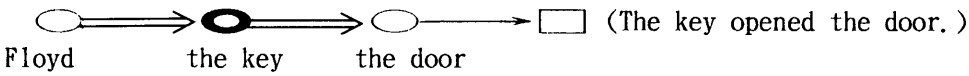
ここでは，事態を【他動】のパターンで捉える場合についてみてみよう。例えば，ある事態がおこって，それを捉えるときに，何に焦点が当てられるかによってその捉え方が異なってくる。「Floydがドアを開けた」ことを認識したとき，基本的には次のような認知構造になるであろう。Floydが前景化され，言語化されて主語になる。



ここで，この基本的な構造に道具（手段）を関与者の一つに加えることができ，拡張した認知構造をもつことになり，その結果，拡張した構文となる。

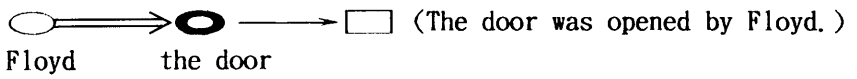


その道具（手段）に焦点が当てられて前景化すると，そこが主語として言語化され，動作を行う関与者は背景化される。

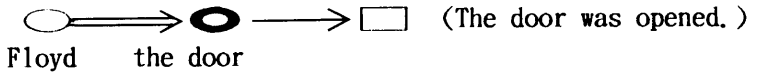


このとき，動作主は背景化されるとして，同じく背景化された非動作主の方は言語化されるのに，動作主の方は言語化されないのかを明確に表すことができない。

また，エネルギーが到達する関与者（非動作主）が前景化されると，動作主は背景化されて，次のような受動形の文で表される。



しかしながら，次のThe door was openedという文の認知構造は次のようになる。



この違いは，この認知構造だけでは，説明がつかない。さらに，中間構文も同じような構造をもつが，この違いもうまく表わせない。

2．2．認知のスコープ

このことから，観察者がセッティングの外からの事態を見ているとするステージ・モデルとビリアードボール・モデルの結合したCanonical Event Modelという認知のスコープの存在を考える必要が出てくる。つまり，観察者の事態を見ている範囲を下のFigure 8の四角く線で囲んで表す。

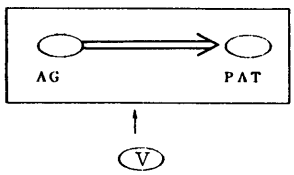


Figure 8 [10]

これ以後，認知のスコープは破線で四角く囲んであらわすことにする。この認知のスコープを考

えることによって，話し手の認識の範囲を知ることができ，基本パターンの拡張した認知の仕方をより詳しく知ることができる。

例えば，Figure 6の全てが認知のスコープの中にあるとすると，下記のような認知構造が考えられる。ここでは，行為を行ったエネルギーの出発点から，他のものにエネルギーが移動し，変化した後の結果の状態まで全てが，観察者（話し手）の認識の範囲内にあることが示される。

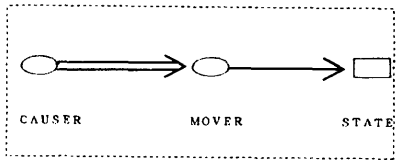
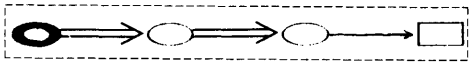
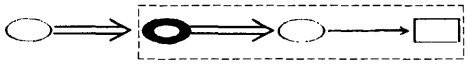


Figure 9

認知の基本パターン，「図」と「地」の関係，認知のスコープを合わせることによって，認知構造が明らかにされる。例えば，次のように認知構造の違いが明確になる。


(Floyd opened the door with the key.)

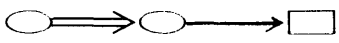

(The key opened the door.)

3．中間構文の認知構造

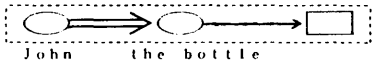
3．1．受動文と中間構文

どの認知パターンで捉え，それを表現するかは動詞に一義的な決定権があるとする。ここではBREAKを例にとって，受動形と中間構文の認知構造の違いをみる。BREAKは必ず，【他動】の認知パターンで認識され，「壊す者」と「壊されるもの」が必要になり，過程も《使役》，《変化》，《状態》を取る。このことを（　　）に入れて表す。

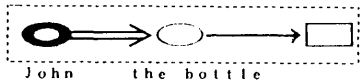
BREAK (○, ○ CAUSE, BECOME, STATE)



ここで，関与者がJohnとビンであることが決まると，下記のような認知構造が考えられる。



何も無ければ，「壊した者」に焦点が当てられ前景化され主語としてあらわされる。



(John broke the bottle.)

しかし，「壊されたもの」に焦点が当てられ前景化されると，「壊した者」は背景化されて主語にはならず，前置詞byによって導かれる。


(The bottle was broken by John.)

そのとき，誰によって壊されたか，「壊した者」が話し手の認識にないときは，「壊した者」には触れず，by Johnは表されない。また，「壊されるもの」は前景化されるが，このとき焦点化される過程は《使役》の過程ではなく，《変化》の過程と《状態》である。ここでは「壊した者」と，《使役》の過程は背景化され，認知のスコープの外にでる。


(The bottle is broken.)

中間構文も，自動詞の構文をとっているが，認知のパターンは【他動】であり【変化】ではない。さらに，「壊した者」より「壊されたもの」に焦点が当たる。中間構文での行為を行った者は受動形の場合と異なり，特定化されていない。関与者が，people in generalとthe bottleに決定されると，次のような認知構造をとると考えられる。

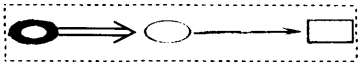


(The bottle breaks easily)

このとき，「壊されたもの」に焦点が当たり，動作主は背景化されるというより，特定化されないためぼやけて，認知のスコープの外にあると考えられる。ただし，《使役》の過程は認知のスコープの中にあるため，関与者の一つであるthe bottleに受け身の意味が認識される。関与者の一つであるthe bottleにその行為（BREAK）に対して責任を負う特性が認められる[11]。従って，このビンは誰がしても壊れやすいのであって，動作主は問題になっていない。従って認知のスコープの中には入っていない。SELLも同様で，基本的には下記の認知パターンをとる。

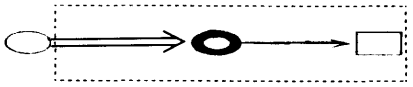
SELL (○, ○ CAUSE, BECOME, STATE)

関与者が「特定の人物（John）」と「ホン（this book）」に決まると，認知構造は次のようになる。


(John sold this book.)


(This book was sold by John.)

関与者が「不特定の者」と「ホン（this book）」であれば，その認知構造は次のようになる。



(This book sells well)

しかしながら，全ての動詞が中間構文をとれるとは限らない。例えば，GIVE, HIT, BUYなどはとれないが，ここではBUYの場合を考察してみよう。BUYも関与者を二つとり，《使役》，《変化》，《状態》の過程を取る。

BUY （○, ○ CAUSE, BECOME, STATE）

関与者が決まる場合，行為の成就は行為を行う動作主に依存するため，必ず特定の動作主を必要とし，《使役》の過程を欠くことはできない。従って，他方の関与者が前景化されたとき，受動形になれるが，動作主を認知のスコープの外に出すことはできないため中間構文にすることはできない。

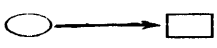

(This book was bought by John.)

3．2．中間構文と能格構文

能格構文は中間構文とエネルギーの到達点（非動作主）が主語になっている点では共通である。しかし，副詞と共起しないという言語化された区別のほかに，主語の特質にも異なる点がある。副詞のことは，次の3．3で考察するが，ここでは主語の特質の違いから認知構造の違いをさぐっていく。能格構文で表される場合は，観察者（話し手）にとって，外からのエネルギーは，関与者に影響を及ぼしその行為（変化）を起こさせるが，その働きは直接的ではなく間接的，補助的なものとして映っている。観察者（話し手）にとっては，能格構文の主語には自分の力で動く動作主的な役割があるようにとられていると思われる。つまり，中間構文の主語より，自動性があるということになる。このことは中間構文は進行形にも命令文にもできないが，能格構文は次のように命令文にも進行形にもできることからも示されている。[12] 18の例文から，能格構文の主語は変化の行為を行う動作主としてとらえられていることがわかる。

18.[13] Sink, boat!
Close, door!
Bounce, ball!
The boat is sinking.
The ball is bouncing.
The door is closing.

換言すれば，基本的には，中間構文は【他動】の認知パターンで認識されるが，能格構文は，【変化】の認知パターンで認識されるのである。

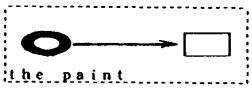


話者の焦点は《変化》そのものの過程と，その関与者そのものにあり，外からのエネルギーはその動きを進めるように付け加えられたものである。

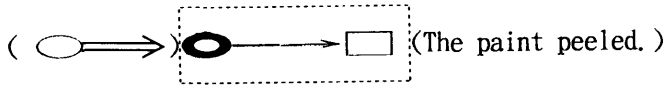
ここで，「ペンキがはげた」事態を考察してみよう。動詞は，PEELであり，次のように1．と2．の両方の認知のパターンが考えられる。

PEEL 1．（○ ○ CAUSE, BECOME, STATE）
2．（○ BECOME, STATE）

ここで，関与者がthe paintであると決定され，その《変化》の過程に焦点が当てられるとなると，2の方が選択される。



外からのエネルギーは，（　　）で付け加えられる。



3．3．副詞

多くの文法家が指摘しているように，中間構文は普通，副詞とともに用いられる。[14] しかし，全ての副詞と共起するのではなく，一部のものにすぎない。ここでは，上記の仮説に従って，副詞のこの構文における役割を見ていく。

19.[15] Greek translates easily.
The baggage transfers efficiently.
Messages transmit rapidly by satellite.
The car moves easily.

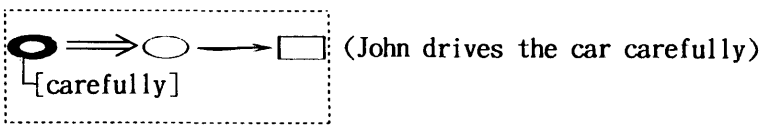
しかし，受動文はskillfullyやcarefullyとなどの様態を表す副詞と共に現れることができるが，中間構文はこれらの副詞とは共起しない。[16]

20. a. This car was driven carefully.
b. *This car drives carefully.
21. a. This book was read skillfully.
b. *This book reads skillfully.

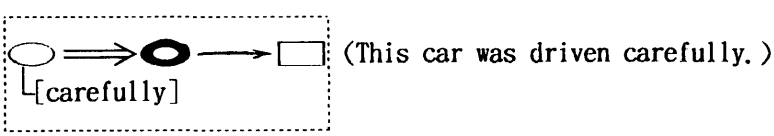
このことは，中間構文と受動文の違いを表している。Vendler（1987）は行為にかかわる副詞を分類したが，skillfullyやcarefullyは“manner adverbs”[17] に分類される。これらは次のCに属し，eventのverb（NVの内のV）には属さない。[18]

Action = C (event)[19]　　event = NV

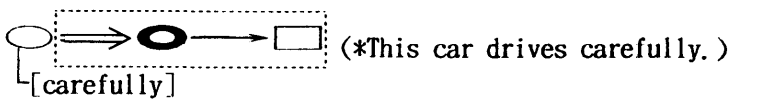
見方を変えてみると，これらの副詞はCAUSERの使役の仕方を表し，CAUSERと強く結びついているといえる。



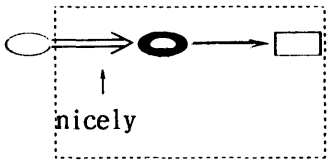
動作主とCAUSE《使役》は背景化されているが，基本的には【他動】パターンである受動構文では，carefullyは共起できる。ただし，この場合は状態ではなく，受け身の意味が表され，動作主の存在は認知される。



それに対し，中間構文では行為を行ったもの（CAUSER）は特定化されず，その行為が成り立つかどうかは，到達点（非動作主）の特質が大きくかかわっている。従って，エネルギーの出発点が認知スコープの外にある中間構文ではcarefullyは共に現れることができない。

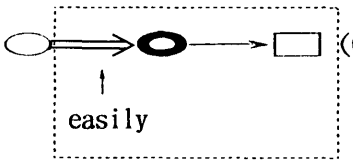


副詞 easily, efficientlyなどはエネルギーの出発点とは直接結び付いてはいないが，そこから発せられる《使役》の過程を修飾している。特定化されていない誰でもが後続の変化を起すことができるので，《使役》の過程を修飾しているといえる。例えば，1．c．の例文のように誰でも自動車を苦労なく運転することができるので，nicelyは《変化》の過程ではなく，《使役》の過程を修飾している。また《使役》の過程は認知のスコープの中にあるので，言語化されてこの構文と共に現れる。



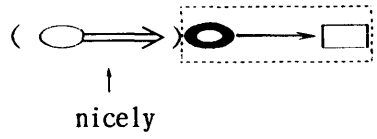
(This car drives nicely.)

例文19の一番目の文でも，「苦なく」翻訳するのはギリシア語ではなく，「特定化されていない翻訳する者」であるので，副詞 easilyは《変化》の過程ではなく，《使役》の過程を修飾しているとみなされる。



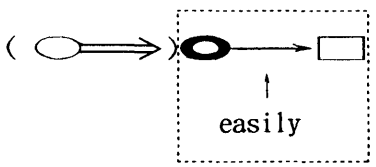
(Greek translates easily.)

能格構文では，先にみたように基本パターンは【変化】で，自動詞構文がそれに対応する。3．2．でみたように，能格構文では行為の原因を起こしたもの（エネルギーの出発点）も，そこから発せられる《使役》の過程も二次的に付け加えられたもので，この構文では認知のスコープの中に入らない。従って《使役》の過程を修飾している副詞は共に現れることができない。



(*The paint peeled nicely)

ただし，副詞が変化の様子を修飾するものであれば，つまり，《変化》の過程を修飾しているものであれば，この副詞は能格構文と共起できる。次の例文では，ドアそのものが「容易に」開くのである。

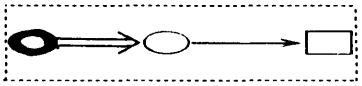


(The door opens easily.)

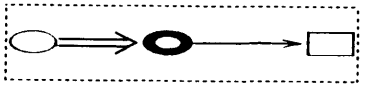
このように，The door opens easilyという文は中間構文にも能格構文にもみなすことができるが，その場合の副詞の修飾する過程はそれぞれ異なるのである。[20]

4．結論

認知構造の視点から見ると，受動文と中間構文は【他動】の認知パターンで認識されるが，能格構文は【変化】の認知パターンで認識さていることがわかる。それらは，それぞれのプロトタイプで認識されるのではなく，一部拡張されたパターンで認識されている。【他動】のプロトタイプは，次に示されるように，エネルギーの発生源のものから出たエネルギーが他のものに影響を与えて変化を起こさせるような事態であり，他動詞構文がそれに対応する。さらに，その行為を起こさせる動作主が最も際だったものとして主語として表される。


(John opened the door.)

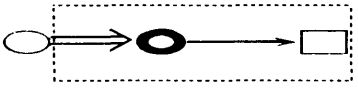
一方，受動文では，エネルギーの到達したものに焦点がおかれて前景化され，主語としてあらわされる。動作主はスコープの中に入ってはいるが，背景化され主語にはならず，by～の後に置かれる。その際，動作主が言語化されるときは，《使役》の過程も前景化されて，下記のような認知構造となる。


(The door was opened by John.)

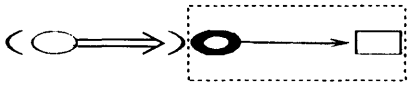
しかし，動作主が言語化されない場合は，《使役》の過程は背景化される。


(The door was opened.)

中間構文は，同じく【他動】の認知パターンで認識されるが，行為の出発点つまり動作主は不特定多数で特定化されていないため，非常に弱く認知のスコープの中には入っていない。が，《使役》の過程は背景化されてはいるが，認知のスコープの中には入っている。このことは，《使役》の過程を修飾する副詞がともに現れていることで説明される。したがって，中間構文の認知構造は《使役》の過程から認知のスコープの中には入っている次のようになると思われる。


(The door opens easily)

能格構文は，【変化】の認知パターンで認識されている。焦点はものが変化，移動する点にあり，自動的な動きである。動作主からのエネルギーの動きは，二次的に付け加えられたもので，拡張されたパターンで捉えられている。動作主だけでなく動作主からのエネルギーの動きも，認知のスコープに入っていないのは，その《使役》の過程を修飾する副詞がともに現れていないことでも明らかである。能格構文の認知構造は次のようになる。


(The door opens.)

非動作主が主語となっている類似した構文もこのように認知構造を調べることによってその認識のされ方が異なっていることが明らかになる。

注

1．これらの文は，イエスペルセンによってthe Middlesと呼ばれ注目を得たが，その後Activo-Passive, Actives with Passive Meaning, Patient-Subject Constructionなどと呼ばれたが，最近では，the Middle Construction（中間構文）と呼ばれることが多い。また，能格構文（the Ergative Construction）との違いについても議論されている。日本語には，『この本はよく売れる』，『このドアは開きやすい』というように中間構文がよく使われるが，ドイツ語，フランス語では再帰代名詞をともなうことが多い。

Das Buch verkauft sich gut.

Ce liver se vend bien.

この再帰代名詞を用いることは，ドイツ語，フランス語でも他動詞としてこれらをとらえ，行為が主語におよんでいることを示していると思われる。

2．Keyser & Roeper (1984) p.383。

3．Langacker (1991 b) p.283。

4．Langacker (1991 b) p.283。

5．Langacker (1991 a) p.217。

6．Langacker (1991 b) pp.304-329。

7．Taniguchi (1994)を参照。Croft (1990)はcausal chainとよんでいる。英語は《使役》の過程が，日本語は《変化》の過程の方が焦点化され易い言語であるといえる。池上（1984）の英語は「する」型の，日本語は「なる」型の言語と特徴づけたことと一致する。

8．Langacker，中村（1989），山梨（1995）は，《変化》の過程を⋀⋁▸で表している。

9．中村（1989）は構文の拡張と意味構造の関係，構文ネットワークとその意味構造ネットワークの関係を検証している。

10. Langacker (1991 b) p.285. Langackerは実線で描いているが，ここでは《変化》の過程を表す線を直線で表すため，区別しやすくするために破線で描くことにする。

11. van Oosten (1977)は，この構文をpatient-subject constructionとよび，「動作主は行為に責任をもたず，主語になっている非動作主が責任をもつ」といっている。

12. Keyser & Roeper (1984) p.384-385。

13. Keyser & Roeper (1984)参照。

14. 15. Keyser & Roeper (1984)からの引用であるが，下線は現著者による。

16. Vendler (1984), Taniguchi (1994) p.174参照。

17. Vendler (1984) p.305。

18. Vendler (1984) p.305。

19. Vendler (1984) pp298-299. Cはcauseを表している。

A does C (event)とも表している。これはさらに，A does C (NV)とも書き換えられる。

20. Vendler (1984)はeasilyを用法によって二つに分類している。

参考文献

DeLancy, Scott, (1987) "Aspect, Transitivity and Viewpoint" in P.J Hopper(ed). *Tense and Aspect: Between Semantics & Pragmatics*, Amsterdam, John Benjamins.

Fagan, Sarah M,B, (1989) "The English Middle", *Linguistic Inquiry* vol.19, 181-203.

Fillmore, Charles, (1968) "Case for Case" in E.Bach & R.T.Harms (eds) *Universals in Linguistic Theory*, Holt, Reinhart & Winston, 1-88.

Gruber, Jeffrey (1967) "Look and See", *Language* 43, 937-947.

Fellbaum, Christiane (1985) "Adverbs in Agentless Actives and Passives" *CLS* 21, 21-31.

Hopper, Paul J & Sandra A Thompson, (1980), "Transitivity in Grammar and Discourse" *Language* 56, 251-299.

池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

Keyser, Sammuel Jay and Thomas Roeper (1984), "On the Middle and Ergative Constructions in English" *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.

Jespersen, Otto, (1924) *The Philosophy of Grammar*, London, George Allen & Unwin.

Jespersen, Otto, (1933) *Essentials of English Grammar*, London, George Allen & Unwin.

Lakoff, Geroge (1977) "Linguistic Gestalts", *CLS* 13, 236-287.

Langacker, Ronald, (1987 a) "Nouns and Verbs" *Language* 63, 53-94.

Langacker, Ronald, (1987 b) *Foundations of Cognitive Grammar 1: Theoretical Prerequisties*, Stanford, Stanford University Press.

Langacker, Ronald, (1991 a) *Concept, Image, and Symbols*, New York, Walter de Gruter.

Langacker, Ronald, (1991 b) *Foundations of Cognitive Grammar 2: Descriptive Application*, Stanford, Stanford University Press.

Lyons, John, (1977) *Semantics*, Vol.2, Cambridge, Cambridge University Press.

中村芳久 (1989) 「構文の認知構造ネットワーク」『言語学からの眺望』九州大学出版会, 247-268.

Oosten Jeanne van (1977), "Subject and Agenthood in English", *CLS* 13, 459-471.

Taniguchi, Kazumi (1994) "Cognitive Approach to the English Middle Construction" *English Linguistics* 11, 174-196.

Vendler, Zeno, (1984), "Adverbs of Action", *CLS* 20, 297-307.

山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房